

ルーマニア紀行

獨協医科大学消化器内科主任教授 寺野 彰

昨年4月末から5月初旬にかけてルーマニアを訪れる機会があった。皆さんのほとんどがこの国がどこにあるのか意識されたことがないと思う。しかし、ドラキュラやコマネチあるいは暴君であったチャウシェスクなどの名を聞けば、「ああ、あの国か」という記憶はあるはずである。ブルガリアなどととも、バルカン諸国を形成しているが、つい先程まで共産圏に属しており、ロシアはちょっと恐いお隣さんである。西の方はユーゴスラヴィアでこれも油断がならない。またルーマニアは名前のとおりローマに由来している国で、このあたりでは唯一ラテン系で、周りはすべてスラブ系諸国である。このあたりが宗教とならんでこの国を不安定にしているゆえんでもあるようだ。



ともかく、われわれは、ルーマニアのヤシ(Iasi)という聞いたこともない小都市へ学会のために出かけることになった。学会はバルカン医学会であるが、その中でぜひとも日本と「ヘリコバクターピロリと胃癌」というシンポジウムをやりたいとの申し出があり、小生がその組織委員長となったため出かけざるを得なくなった。というのは、医学会長のス



ヤシでのレセプションパーティー：ルーマニア語で挨拶中。文部大臣（左端）とStanciu学長（中央）

タンチュー学長とは、数年前横浜で開かれた消化器病学会で、「メデイカルエシックス」という倫理問題をめぐる国際シンポジウムで一緒に司会をやって以来友人になったので、断るわけにいかなかったといういわくがある。

杏林大学や自治医大の教授たちとチームを組んで出かけたのであるが、やはり思ったとおり遠い国であった。チューリッヒからさらに3時間の飛行で首都のブカレストにつき、一泊して翌日2日に1回あるという飛行便でヤシについた。その間、実はその当時、NATOに爆撃されている最中のユーゴスラビアの上空を飛び、小生は夜の眼下にミサイルの砲火を

見たといったのだが、誰も信用してくれなかった。

なんとかヤシについてののだが、驚いたことにスタンチュウ先生は自動車で飛行機のタラップまで迎えにきていたのである。要するにエアターミナルビルはもちろんゲートもないのである。熱烈な抱擁の後自動車でホテルに向かったが、その途中で検問があり、自動小銃を持った警備兵には少し驚かせられ、共産圏のなごりを感じたものである。後で聞けば、ヤシから東へ10キロ行けばロシアとのことで無理もないのである。

ホテルは「ホテルモルドバ」という超一流ホテルとのことであったが、いかんせん物資不足は明らかで、一生懸命(?)アルコールを飲んで寝るということになった。しかし、ヤシの町そのものは大学町というだけあって、清潔で昔モルドバ王国の首都であった面影を十分に宿していた。教会や王宮など12、3世紀の建物が大切に保存されている。この点は共産軍によって壊滅状態になっているブカレストとはまったく趣が異なる美しい町である。大学もすばらしい建築物で、講義室も数世紀前のものがきちんと保存されていて感激した。落書きもほとんど見られなかったが、庭のコンクリートに「NATO GO HOME!」と書かれていたのが印象的であった。一般的に西欧風の贅沢品はデパートでもほとんど見られないが、食物などは豊富なようで貧困はあまり感じなかった。



さて、学会は町の真ん中にある宮殿で開催されたが、その前のシンポジウムのオープニングセレモニーは、スタンチュウ学長室で、約



50人のお歴々が参加し厳粛な雰囲気の中で開かれた。なんと文部大臣もわざわざブカレストからこのシンポジウムのために来られ、ルーマニアの医療行政について訓示された。続いて小生の挨拶で、前日覚えたルーマニア語で始めたところヤンヤの喝采を浴びた。やはりわれわれでも外国人が少しでも日本語を使うとうれしく親しみを感じるように、この感覚は世界共通であり、一種の礼儀なのではないかと小生は感じ、どこの国へ行っても最初の挨拶は現地語でやることにしている。このセレモニー後、大学で朝から夕方まで発表、討論が続けられ、胃癌の診断と治療をめぐって熱心な討議が行われた。ルーマニアも胃癌の多発国といわれるが、早期胃癌はまだまだ診断されておらず、日本からの粘膜切除術などの内視鏡的治療の報告には参加者全員目を輝かせていたのが印象的であった。やはり経済的にみて最新の内視鏡設備の購入は困難なようで、日本からもこのような形での援助があってもいいのではないかと思う。ともかく参加者全員眠るものはなく、熱っぽい緊張した一日が過ぎた。このシンポジウムの様子は翌

Essay

日の地元新聞に大きく報道され注目を集めたいらしい。

その夜は、民族料理を囲んでのダンスパーティーが催され、われわれもその中に巻き込まれ、民族舞踊の激しいフォークダンスで昼間の疲れを癒したものである。ともかく本来楽天的な民族なのである。皆この国民の大ファンになってしまった。われわれ男から見ると本当に美人が多い。女性から見てもいい男が多いのだそうである。日本からもっと積極的にアクセスすべき国である。ただし、ジブシーには、観光中十分気をつける必要がある。小生はうっかりカメラを向けたため、ジブシー女性多数に囲まれてひどい目にあったという経験を持つ（詳細省略）。



ヤシからの帰途は、ルーマニアまで列車を利用することになった。実に6時間の旅である。車内販売もないとのことで、弁当とビールを買い込んでコンパートメントで長時間過ごすことになった。窓から見る風景は行けども行けども大平原なのであるが、その美しさには飽きることはなかった。ゆっくりしたスピードであるから窓外の並行して走る車に手を振ればにこやかに反応してくれる。印象的だったのは、コンパートメントの外から、つまり列車の通路から、しつこく実に1時間以上わめいている10歳前後の男の子であった。どうせ金をせびるのだからと、ドアを開けずに知らぬ振りをしていたところ、演説調になってきたのでどうしたのかと思っていたら、同行の一人がやっと気付き、これはわれわれの弁当の残りをよこせとっているらしいといひ出した。ためしに余った弁当を出してやっ

たところ、「やっとわかったか」という風に、非常に喜んでもう一人の仲間と山分けをし、うまそうに食べたのである。残りは一緒に乗っていた障害者の父親の車いすに大切にしまい込んだという。「この坊主はきっと将来の大統領になるだろう」というのが皆の感想であったが、この国の実状を表したエピソードでもあった。

ブカレストでは、チャウシェスクの作った「国民の館」を見学した。ペンタゴンに次いで大きな世界的なこの代物は、国民の血と汗の結晶であるが、共産圏の政治の典型ともいえるものであった。



さまざまな思い出を胸にルーマニアを後にしたが、この不安定な国の将来には胸がいたむ思いであり、今後我が国の援助もこの目立たない国へも向けられるべきであり、われわれ医療人もその認識を深める必要があろうと感じたものである。